

イサムノグチの芸術教育思想

笹本正樹

まえがき

イサムノグチは、日本人を父にもち、アメリカ人を母にもつて、誕生した。しかし、私生児として育つたために、八十四歳の死まで多難な人生をすごした。さらに、彼の芸術作品は東洋と西洋を融合したものであるとして、二十世紀後半のアメリカ彫刻界の巨匠として、その名を残すことになった。

彼は晩年の二十年間ほどを、四国高松市郊外、屋島の近くに住んだ。私は、彼の世界する六年ほど前に、屋島の南東の角に家を新築した。(昭五七)私の家から、彼の住んでいる武家屋敷や石のアトリエ迄は、三キロほどであったので、バイクで十分間であった。

私は、彼が石のアトリエで、彫刻するところを眺めたり、彼の作った庭園について、詩を捧げたり、新聞にそ

の製作態度を随想風に書いたりした。そして、彼の死後、十回忌の折に、児童むけの「緑の眼をしたおじいさん」(美巧社)を上梓した。氏は孤独に製作するのを好んでいた。なかなか親しく語り合うことはできなかった。ただ、私は教育方法学者として、彼の母がどのようにイサムを育てたのかを、聞いてみたかった。

そのことについては、彼はなかなか語らなかった。実は、私生児としてイサムが生まれたことは、イサム自身だけでなく、その母が悲惨な人生の道を歩くことになつたのである。それ故、彼はその哀しみを他人に語りなかつたのである。だが、私の熱意に負けて、次に来た折に話しましょうと、米國に帰っていった。(冬から春にかけてはニューヨークに滞在した。)しかし、その年の十二月三十日(昭六三)に風邪をこじらせて、逝去した。

彼は、二十世紀後半の彫刻界の世界的巨匠であった。その彫刻や庭園、公園は世界中に点在している。しかし、

彼の芸術作品についての批評や評価はまだ定まっていな
い。ましてやその生活は、まだ不明のところがある。
(とくに父と母との関係について) それ故、彼の芸術思想
もまだ定本といったものは少ない。ましてや、彼の芸術
教育思想といったものはとらえ難い。

しかし、彼は晩年、子どものための作品や遊園地、公
園などをつくっている。彼は子ども頃、不幸であり十
分遊んでいないという。そのため、今の子どもに幸福な
遊び場を提供しようというのである。

この論文では、彼の生涯、芸術作品、そして雑誌に発
表された対談などを通して、芸術教育にかかわる彼の考
え方を把握していきたい。また、私が彼に接して感じた
芸術家の自己教育のようなものを述べてみたい。彼の
中に、芸術教育思想という明確なものはないけれども知
れないけれど――。

一、イサムノグチの生涯

ここにイサムノグチの生涯を語るためには、その父の
ことから話さなければならぬ。

彼の父、野口米次郎(通称、ヨネノグチ)は明治八年

十二月八日、愛知県津島市(現在)に生まれた。家は小
さな雑貨屋であった。しかし、先祖は青年織田信長をい
さめて切腹した家老、平手政秀(名古屋市内に、政秀禅
寺がある)であるということに、米次郎は限らないブラ
イドをもっていた。

彼は十五歳で上京し、十七歳で慶応義塾に入学した。
だが、翌年、明治二十六年十一月三日、単身、サンフラ
ンシスコにむかった。これからは米国の時代だと、人か
ら聞いたためである。西海岸につくと、「桑港新聞」の配
達ボーイをした。次に、市立高校の寮に住み込み、掃除
雑用係をした。日清戦争がおこると、桑港新聞の記者と
なった。さらにオークランド高丘に住む仙人風詩人のウ
オーキン・ミラーの下男として入り込む。詩人として有
名になりたいと思つたのである。明治三十年処女詩集
「見界と幽界」(Seen and Unseen)を出版する。

大陸横断してニューヨークに行き、明治三十四年「お
蝶さん日記」を書く。これを英訳してくれる人を、新聞
の求人広告で募つた。これに応じてきたのが、レオニ
ー・ギルモアであった。彼女は異国の美青年の文化的協
力者となつた。

レオニー・ギルモアの父は、アイルランドからの移民

である。母は看護婦をしていた。レオニーはニューヨーク生まれ、プリンマー大学をでて、作家を志していた。(大学時代、津田梅子が上級生として在学している。)彼女はヨネノグチの日本語を、できるだけよい英文にすることに成功した。

米次郎は文化の中心はむしろ英国とみるや、ロンドンに渡り、「東海より」(From the Eastern Sea)の詩集を上梓して、英国文壇で人気者となった。もちろん英文はレオニーに見てもらっている。ニューヨークに帰り、同棲する。日露戦争が始まったということで、彼は日本に帰国する。

レオニーは妊娠していることに気づき、彼の後を追う。そして、ロサンゼルスでイサムを出産した。野口米次郎は慶応大学助教授となり、結婚相手も決っていた。

イサムノグチは明治三十七年生まれである。母と共に日本にやって来たのは、明治三十九年であった。米次郎はふたりを迎えたが、イサムを認知はしなかった。

レオニーはイサムと共に、茅ヶ崎に隠れるように住んだ。彼女は自活のため、家庭教師をした。家庭教師で教えた青年と恋におち入り、アイリスを出産した。

イサムは家出をしたりしたので、彼が中学生となる時、

母レオニーは米国に渡るようイサムを説得した。彼は単身、インディアナ州まで旅行していく。インターラーケンの校長は以後ずっと、親がわりとなって、この薄幸の少年の面倒をみることになる。

のち、コロンビア大学医学生となったが、野口英世のすすめもあつて、彫刻家となることを決意する。そして、パリに趣き、有名な前衛彫刻家ブランクーシの助手を勤める。

ニューヨークに戻って、最初の個展を開く。二十五歳であった。生計をたてるのが大変であったため肖像彫刻を製作する。パリに戻り、父親に会いたくて、シベリア鉄道で北京に入る。ここで青白石より毛筆を学んでいる。そして、ひそかに日本に入る。父のヨネノグチはいっしょに京都の禅寺庭園をめぐる。イサムは感銘を受け、のちに作庭にこころがける。宇野仁松より作陶の技も教えられる。

ニューヨークに戻り、テラコッタと毛筆アッサン展を開く。人気を呼び、有名な芸術たちと親交を深める。また、絶世の美女といわれた女優ドロシー・ヘイルと恋愛する。彼女はのち、高層より投身自殺をする。十七年間、日本にいた母は帰国し、五十九歳で没する。

メキシコに行き、この国の歴史を示す壁画浮彫りの共同製作に加わる。この折、メキシコ第一の画家であったデイエゴ・リベラと親交、彼の妻フリーダ・カーロと恋愛する。のち発覚し、アメリカに逃げる。

第二次大戦の折は日系アメリカ人強制移住キャンプに志願して、入所した。わが国が原爆で無条件降伏した頃、四十歳に近いイサムはインドの美少女と会い、熱烈な恋におち入る。十六歳のナヤンタラはネルー首相の姪であった。イサムは何回もプロポーズする。相思相愛であったが、この恋は彼女の立場上、成立しなかった。結婚はできなかった。

戦後、ボーリンゲン財団の助成金を受けて、ヨーロッパ、中東、アジアを旅行する。ヨネノグチは昭和二十二年に逝去する。イサムが日本に来たのは、その後であった。戦前、銀幕に李香蘭として人気の高かった女優、山口淑子と結婚する。鎌倉の北大路魯山人の別邸を借りて、陶器づくりをし展示会をもつ。淑子、スパイ容疑で渡米できず、四年後に離婚となる。

パリのユネスコに日本庭園をつくることになる。ニューヨークで、環境デザイン、鉄材と大理石の彫刻を展示する。ファースト・ナショナルシティ銀行のために、最

初の広場を設計する。ニューヨークのロンゲアイランドシティにアトリエを構える。(昭三三)

ニューヨーク市のチエイス・マンハッタン銀行、イェール大学バイネツケ図書館、アイ・ビー・エム、イスラエル美術館の庭園を設計する。横浜の「子どもの国」に最初の遊園地をつくる。

イタリアのクエルチュータの採石場で製作を開始する。クロード・ベルナル画廊でバリ最初の個展。翌年、一連の大理石および花崗岩の作品を展示する。

アメリカのホイットニー美術館で回顧展。「ある彫刻家の世界」(昭四三)出版する。ニューヨーク市に「赤い立方体」、イタリアのスポレート市に「オクテトラ」、シートル市に「黒い太陽」、ワシントンのペリンガム市に「空を見上げる彫刻」として、公共彫刻を製作する。

四国牟礼にアトリエを構える。一連の花崗岩彫刻、玄武岩彫刻を始める。デトロイトに巨大な噴水を含む大規模な広場をつくる。東京の最高裁判所、バームビーチの四芸術協会、シカゴ美術館に噴水を製作する。ホルル市営ビルディングに「天の門」、東京の草月会館に「天国」をつくる。ヒューストン美術館の庭園を設計する。

ロンゲアイランド・シティのアトリエの向かいにある

建物を買い取り、作品倉庫に改造する。サム・ハンターによって、最初のモノグラフ「イサムノグチ」(昭五三)を出版する。

ノグチの人と作品に関するドキュメンタリーフィルムがPBS放送で放送される。一九八〇年、ノグチの全作品図録が刊行される。イサムノグチ財団が設立される。

マイアミのベイフロント公園再開発のために二十八エーカーの公園を設計する。昭和五十八年四月、イサムノグチ庭園美術館、完成する。同年、テキサス州のキンベル美術館の大規模な公共彫刻「ルイス・カーンのための星座」が設置される。また、土門拳記念館の水を使った庭園が完成する。

昭和五十九年、コロンビア大学から名誉博士号を授与される。ニューヨーク州知事芸術賞と日米市民同盟隔年賞を受賞する。東京の草月会館での「あかり展」で生誕八十年が祝われる。

エルサレムでイスラエル美術館奨励金を授与される。昭和六十一年、ヴェネツィア、ビエンナーレの合衆国代表を要請される。ヒューストン美術館の彫刻庭園が完成する。

京都賞を授与される。国民芸術勲章をロベルト・レー

ガン大統領から受ける。昭和六十三年、日本政府から勲三等瑞宝章を受ける。同年十二月三十日、ニューヨークにて没す。

二、イサムノグチの芸術作品

イサムノグチは肖像彫刻家として、出発している。具象的作品をめざしている。有名人を訪問し、その人の胸像をつくる。すぐ金になったという。その後は、有名女優のものをつ造ったりしている。

さらに二十歳のとき、自分の恋人の像を造って、その美しい像が評判になっている。「ウンディーヌ」という作品であり、バレリーナのナジヤの裸体である。

パリに行き(昭二)ブランクーシの助手として仕える。ブランクーシは彫刻界において抽象作品を創り始めた人である。彼はブリミティヴで、アルカイックな彫刻をめざしていた。それ故、イサムはこの師の作法を真似て、生涯、抽象的な作品を製作していくことになる。しかし、経済的にゆきづまったときは、また胸像をつくったりしている。後年、抽象の彫刻作品は、ピカソ的なものが多くなる。いかに抽象化するかは、パリ滞在期に学んだもの

であらう。

中学生となる時に日本を去つて、ふたたび父の国を訪れたのは、昭和六年である。父の野口米次郎と十二年ぶりに再会している。父は五十六歳で、息子のイサムは二十五歳であつた。京都に四ヶ月滞在した。父は高村光太郎をはじめ、有名な彫刻家に彼を紹介し、竜安寺、天龍寺など、日本庭園を案内して歩く。のちに、このことが彼に公園や庭園を造らせることの契機となつた。その代表的なものはフランスのユネスコ本部に造つた、日本庭園である。

イサムは舞台装置もよく造つてゐる。それはマーサ・グラハムという当時の世界的舞踏家にたのまれたものであつた。これは彼の妹アイリス（異父妹）が、彼女マーサのところへ弟子入りしていたからである。彼はこのロシヤ・アヴァンギャルドの舞台芸術の中に、日本の能舞台の特徴を取り入れた。一つは絶対的詩的性格であり、二つ目は、祭儀的にロープ（繩）を用いることであつた。ロープは紐と紐の結び目が重要視された。舞台における西洋と東洋の融合を試みている。

アメリカ公共事業促進局芸術事業というものがあつて、彼はこうした社会的共同プロジェクトにも積極的であつ

た。それは胸像づくりの個人的芸術よりも、壮大なものであり、社会的意義と同時に、多くの人々の注目を集めるから、と言うことであつたようである。

昭和十年、彼はメキシコに渡り、アペラルド・ロドリゲス広場で壁画レリーフを制作した。メキシコ革命を賛えたものだが、彼は別に思想的なものに感銘したわけではなかつた。この折、現在メキシコを代表する女流画家フリーダ・カーロと恋愛したことは、有名である。

さらに、イサムはインドやバリ島に行つて、その土地の芸術品の不可思議さに魅了された。彼は彫刻だけに捕われてはいなかつた。感覚的に興味あるものには、食欲にたちむかつた。そういうことでは芸術家という言葉の方がふさわしい。

日本人の画家、長谷川三郎と出会つて、禅、茶道、俳句、老荘の教えなどがいかに日本人の生活に精神として入つてゐるかを知らされた。また、雪舟だけが中国の風景を描けたのだと、彼から話されている。（五十四歳のとき、アルミニウムで作つた「雪舟」という名品がある。）

イサムノグチは西欧のアブストラクト彫刻の新興期にあつて、それに東洋的幽玄の境地をプラスしようとした。竹の音、水の音、風の音にも趣きを感じる日本の精神に

関心をもった。それ故、岡倉天心の「茶の本」をよく読んでいたといわれる。また、桂離宮では「音や眺め、さらには連想によつて生じた複雑な感情の詩的暗喩」の感覺的印象の重大さに目覺めたと言われている。

彼は日本の伝統美と共に、西欧のモダニズムの現代的な構造美を追求した。その追求の集中性というものは、一種、壯絶味を帯びていた、と言つてよい。ブランクーシゆずりの「集中力なき者は彫刻家ではない」の精神力であろう。

彼は四十八歳の時に、慶応大学、新万来舎の庭園に「無」という作品をつくつた。これは禪僧の絵のように、少しユーモラスであつて、子供が両腕をあげて、丸くしているように見える。この丸の中に夕陽が入るのを見るのだという。

彼はユネスコ本部に、日本庭園を造つた。しかし、これは純粹に日本庭園ではなくて、日本庭園＋モダニズムとも言ふべきものであつた。日本から呼ばれた庭師は怒つて、帰国したという。それはイサムノグチの芸術作品だつたのである。(東洋と西洋の融合) イサムノグチは日常生活では、芸術家というより、職人精神を重んじていたように思われる。(カーキ色の葉っぱ服を着て、狐独を

いっぱい背負つて、仕事をしていた。)

彼は鈴木大拙の「禪仏教入門」(一九四九年)などを熟讀したという。ジャクソン・ポロックの線は(絵の具をたらして画く)日本の狂草(素早い筆づかい)であると、見ていたようである。

私が彼の作品の中で好きなのは「夢想国師の教え」である。これは五つほどの石ころを置いただけのものであるが、その石と石との距離感とそれぞれの向きによつて、国師の精神が示されている。でたらめに置くとただの石ころに過ぎない。

イサムは十七歳の時に、ガッツオン・ボーグラムという彫刻家の助手をした。この人は山に歴代大統領の頭像をきざむという、壮大なスケールの仕事をする人物であつた。アメリカの風土にふさわしい人と言ふべきかも知れない。イサムも後年、壮大なスケールをもつ制作をすることになる。「チェイス・マンハッタン銀行ブラサの沈床園」やエルサレムのイスラエル美術館「ピリー・ローズの彫刻庭園」など。それは自分もアメリカ人であるのだ、という帰属意識からであつたと思われる。

イサムは次第に「宇宙的なもの」種の中にもコスモスがある」と言つたパウル・クレーの考えなどに共鳴して

いくようになる。そして、渦巻、螺旋、二重螺旋（これはDNA構造と同じ）を用いたりする。

しかし、和泉正敏（高松市郊外牟礼の石匠）と出会ったことは、彼が石の彫刻の世界にのめり込み、晩年二十年間への重大なターニングポイントとなった。代表作品「黒い太陽」（昭四二）は和泉正敏と共同製作を始めた第一の作品である。

高松郊外牟礼に武家屋敷が移築され、イサムノグチの住居となり（秋になるとニューヨークに帰り、春になるとここに来た）「石のアトリエ」「円」ができたのは、イサム六十五歳の頃である。

彼はそれまでデラシネ、世界的放浪者であったが、父なる国によりやく定着したのであった。そこには眼前、北に五剣山がみえ、西に婁屋島が見えて、よい隠れ里となつている。彼はここで、最後の大構想をたてた。それは北海道札幌市東区丘珠町の「モエレ沼公園」である。すでに、十年越しの造成で、二〇〇四年に完成の予定である。

また、和泉正敏は二メートルほどある丸い自然石を半分に分けて、その中にニューヨークから送られてきたイサムの遺骨を入れた。今は岩冢墓となつていて、そこを

詣でる人も多い。その墓は、那須与一の扇の的方向をむいている。名声を日本中に高めた武将の旧跡を眼下にみている。

以上、述べてきたように、イサムノグチはそのスタートがガッツオン・ポークラムという、山を削って頭像をつくるという巨大なことの好きな彫刻家を師とした。そのことは彼にとって、大きな意味があると思う。

彼は彫刻家という呼び名ではくくれない人物であった。しかし、芸術家という名称ならば、びつたりとおさまると言えよう。実に東洋と西洋を融合した作品は、米国のみならず、世界中に点在している。

三、イサムノグチの芸術教育思想

カリフォルニア州のスタンフォード大学の屋上にはのぼると、遙かむこうに作家スタインベックの故郷であるサリナス溪谷が望まれた。私が二十数年前、米国に在外研究者として訪れた時のことである。

今、私が高松大学の最上階から眺めると、遙かむこうに、世界的彫刻家イサムノグチの住んでいた五剣山の麓がみえる。

イサムノグチは昭和六十三年十二月三十日に、ニューヨークで逝去した。八十四歳であった。氏の生前、私は五回ほど牟礼の石のアトリエやイサム邸の武家屋敷でお会いすることができた。

一回目は牟礼久通にできたばかりの小庭園を見せていただいたときに行った時である。彼は日本人とかわらない背丈（米国人としては小さい方）で、眼だけが灰緑色であった。眼をよくみなければ、日本人と見まちがえるほどである。（昭五七・五・一五）

二回目は、私が「少年夢二帖」という、竹久夢二の少年時代を書いた教養小説（協同出版）をさし上げようと、編集長といっしょに行った。日本語は話せても、読み書きはできない、と言うことであった。

三回目は、私の幼年時代を「さくらんぼ分教場」という自伝に書いたとき、香川大学公開講座で、ゼミナール形式でおこなった。後、そのグループが「さくらんぼの会」というものを結成した。その方々を連れて、「四国イサム庭園」を見に行ったのである。

四回目は、金子元香川県知事と会ったとき、これからイサム邸に行くところだ、と言うので一緒にさせてもらった。元知事の持参した柿を三人で共に食べた。その折、

「能や禅の境地を求めて創作しているのですか」と、私は尋ねた。彼はそれには答えずに、米国で出版されている画集を示された。その本には、大きい公園がつくられた写真があった。

五回目は彼の母である女流作家、レオニー・ギルモアのことを聞きにいった。母についての想いは多いので、次にまた来た折に、ゆっくり話しましょう、と言うことで別れた。別れの日に（これが永別となる）、「四国イサム庭園」（銀河詩手帖）という私の作品を示すと、それを読んでみてくれと言うことだった。次の詩を私は読んだ。

石の階段を登っていくと

古代埴輪が踊るように立っていた

ひろい石畳はアメリカの平原か

遠くロッキー山脈がみえる

ミシシッピー河の流れもある

築山にあがれば豪壮な視野がひらき

かなたは那須与一の扇的だ――

屋島に夕かけが淡くさしている

芝生のなかの円形椅子には

母である作家レオニーを腰掛けさせ

松の樹の下の四角の堅い石には

詩人、野口米次郎である父を呼び寄せ

この庭に月光のさす夜ふけは

ニューヨークから渡ってきた

イサムノグチが武将のように

蒼い眼をひからせて立っている

「四国イサム庭園」

イサムノグチと対話したなかで、「今日は日曜だから仕事しませんが」という言葉があつた。西欧の人は日曜には、教会に行つて、仕事は休むと聞いていたので、これは私にとつて意外な返事だつた。

彼はキリスト教徒でないことを示したことになる。また、ウィークデーは人を使つて仕事をしているので、八時半から五時まで、共に働いているのであつた。だから、日曜日は自分ひとりで、のんびりと好きなように働けて嬉しいという風にもとれた。ともかく、石の仕事に集中できる、その時間を惜しんでいるかのようだつた。(考えれば、その四年後に他界している)氏の仕事ぶりは、次のようなことで、尽きると思う。これは芸術家の心意

気であり、芸術家になろうとする人が心がけなければならないことだと思う。

一 石を刻んでいることが、自分の存在証明になる。

二 意志の質を確認するために、石(意志)と格闘している。

三 絶えず挑戦しなければならぬ。挑戦しては崩れそうになり、それでもまた挑戦するところに、人間の尊厳(Dignity)がある。

彼の石を刻んでいる孤独な姿を見ると、よくこのように堅いものに、飽きもせず一日中取りかかつていられるものだと思う。しかし、よく考えれば、そのノミの小さい跡がたまつたていつて、ある模様をつくつていく。そのためゆみない点がある、それぞれの瞬間にみずからの一瞬々々の存在証明になつていくわけである。(編物の一目々々と同じことである。)

第二は、たやすい仕事をしていては、自分の意志の強度というものはわからない。石のように堅いものを相手として、格闘していくときに、その反映として、自分の意思の強さというものはわかる。石のように堅いものを

相手として格闘していくときに、その反映として、自分の意志の強さというものが証明されていく、自分の内部との戦いというものが大切、ということであった。

私たちは、相手にいかに「情」をもって接したかを大切にする。また、ものごとを処理する時に、どれほど「知的」に処理したかを考える。しかし、なかなか意志の質を確認しようとはしない。イサムノグチの集中力のすごさと、孤独に徹しながら仕事をする、その一途さというか、誠実さというか、Sincerityというものを、ひしひしと感じた。

第三番目は「絶えざる挑戦」ということである。彼の作品のなかに「Dignity」というものがある。それは人間の形をしているが、いくつも割れ目が入っていて、今にもくずれ落ちそうな人間の形である。挑戦しては、くずれそうになっているが、こわれてはいない。そこに人間の尊厳がある。何かをしてすぐ成功しても、それは人間の尊厳を勝ち取ったものにはならない。何度も挑戦することのなかに尊厳が生じてくる、と言うのである。

その他、彼の考えの中には「借景」ということが、庭づくりにおいて大切であることを話してくれた。（私はこのことから、人間関係の借景を考えたりした。）また、

「スペース」という概念は、私の考える空間性ともちがっていた。彼のスペースの「場」の意味は、その場には地霊がいて、生霊（私たち）と知らないうちにコミュニケーションしているという捉え方をしていた。だから、芸術家というものは、この両者の霊のパイプ役をする者であるということであった。

いずれにせよ、彼は超一流の人物と交流し、超一流の美女（キャリアウーマン）と恋愛し、それらをバネとして、超一流の仕事をしたのであった。

あなたはいつも眼を閉じていた

その眼はらんらんと内部をみる

外にむかつては盲目でもよいとした

その姿を上から下から、斜めからみた

どこからみても、完全なる光る石だった

道場破りにやってきたと言って

その灰緑色の眸におじぎをしたが

深い睫毛は霧うごく五剣山にむかっていた

きみよ石を切ることは存在証明だ

石と格闘し、石の質を確認すること
そのことよってのみ己の意志の質を知れ、と

冷たいダイヤモンドの眸は

ときに日本刀の曇りを帯びたりしたが
和紙をのばす白い指は優雅な蛇の精だった

今は岩田墓の中に静かに坐していて

高層より自殺した女優ドロシーと並び

裏屋島にかかる黄銅色の満月をみている

「イサムノグチ」

この詩は、彼の死後、イサム庭園の墓に捧げた私の詩である。十一月十七日が彼の誕生日である。毎年、私はこの日この墓にお参りして、在りし日のこの大芸術家の孤独であった灰緑色の眸を想い出すのである。

なお、この「イサムノグチ庭園美術館」はニューヨークの同館と姉妹館ともいえるべきものである。同四国館のパンフレットには、次のように案内が書かれている。

「イサムノグチ庭園美術館は、この地が未来の芸術家や研究者、そして広く芸術愛好家のためのインスピレーション

の源泉になることを強く望んでいたノグチの遺志を
実現したものです。一五〇点あまりの彫刻作品はもとより、自ら選んで移築した展示蔵や住居イサム屋、デザインした彫刻庭園など、全体がひとつの大きな地球彫刻
あるいは環境作品となっています。出来る限り、生前の雰囲気そのまま環境そのものを公開し、併せて専門的な知識研究のためのアーカイヴ（資料研究室）を準備
しています。ジャンルを超えた宇宙的でコスモポリタ
ンな、開かれたノグチの世界像をどうか心ゆくまで味わ
ていただきたいと思えます。」

四、環境芸術家としてのイサムノグチ

イサムノグチは単に彫刻家という言葉では、とらえ
れない。そこで環境芸術家という呼び方が使われるよう
になった。こうした新しい概念で彼をとらえることは、
まことに適切であると思う。では、そうした面から、彼
の主張していることを、戦後の美術雑誌などから、いく
つか取り上げてみたい。

「わたしは自分が時間を遡って、聖書の中になにものか
を建てているのだという考えをいだいていた。」

〔みずえ〕五六・一〇〕

「深い深い孤独よりくる愛のメッセージ、舞台装置、照明、造園、石彫、空間を秩序づけ、活気づけて空間にひとつの意味を秩序づけるのが、そもそも彫刻家なのだ。」

〔魂の木〕小沢書店 八八〕

「音楽家が音を使つてシンフォニーを作ると同じように、彫刻家は物を使つてシンフォニーを作る。それが庭だと思ふ。その中にいろいろなおブジェがある。それは彫刻といつてもいいし、物といつてもいいし、岩といつてもいいし、何といつてもいいわけだ。」

〔芸術新潮〕五九・七〕

「庭には歩道はいらない。あつてもその道をただ一人の人が冥想して歩くべきものだ。がやがやと談笑して歩いたりしたら、庭の精神的空間は、たちまちに霧散してしまふであらう。……精神だけが庭を歩き、そして自分の故里を感じていればよいのである。」

〔芸術新潮〕六〇・七〕

「この彫刻の庭はひとつのセッティングないしステージであり、そこに彫刻を置けば、その目的——すなわち、そのドラマを高めること——をひとつの生きた体験として明示するのを助けるだろう」

〔みずえ〕五六・一〇〕

「スペース……そこにはトランキリテ（静けさ）がなくてはならない。そしてリフレクション（内省）のための時間という意味もある。リフレクションとは、外界から自己の鏡に写つたものを、内省し、熟考して、さらに写し返すといった意味をもつことから、リクリエーション（造り替え）と言つた方が正しいかもしれない。」

〔芸術新潮〕六〇・七〕

「日本人は愛国的で、それが日本の伝統の一部をなしている。日本が世界に及ぼす影響はすばらしいと思ふ。日本が世界に与えたものはどれも驚嘆すべきものだ。」

〔ニューズウィーク 八六・一二〕

「日本という国は、そういうふうには、一番古いものにも興味をもっているし、一番新しいものにも興味をもっている。それがぼくには興味深いのだ。」

〔芸術新潮〕五七・七〕

「日本の庭のひとつの原型として、島が点在する瀬戸内海風景があるんじゃないか、という気がします……龍安寺の石庭とか、苔むした庭の飛び石などそうです。」

〔芸術新潮〕八四・一二〕

「そのイメージは島々に神々が棲んでいたころのギリシ

ヤと非常に似ている。日本がなぜこれだけの文化を生んだか不思議がる人々がいるけれども日本の文化の力というのは、ギリシヤ同様、こうした特殊な環境から生まれたのではないか、そんな気がします。」

〔芸術新潮〕八四・一二

「日本では、^レ生きさせる^クという言葉があるが、それがおもしろいと思う。お花でも、^レ生ける^クというものを生かすという考え方はお茶につながっているかも知れない。」

〔芸術新潮〕五七・七

「芸術、文化、音楽、その他すべての面で西洋への開国は日本に大きな刺激をもたらした。今や日本も世界の他の国に同じような刺激を与えつつある。」

〔「ニューズウィーク」八六・一二二〕

「我々はあなた方の自然への愛、あなた方の庭園、それからそれらが意味する閑暇の観念等を、高く評価し始めている。」

〔「芸術新潮」五一・一〇〕

「克己の信条が生活と芸術とに明らかに反映している場所は日本である。禅は……無である。わびとかさび、最少のなかに最大がある」〔「芸術新潮」五一・一二〕

「僕は夢想国師に非常に興味もっています。西芳寺にある石組み、あれは凄いものです。始まりや終りがな

い。」

〔「芸術新潮」八四・一二二〕

「禅は……聚落的の制度の中に芸術の宗教性が非常に深く入ったものです。ある家と、活花と、庭と、その中にいる人、その存在する人がこの小さい世界にどのように生さられるものか。禅はそれをよく教えているでしょう」

〔「芸術新潮」五〇・九〕

「日本の力強い伝統からまなびとり、しかもそれに圧倒されずに如何にそれをコントロールしていくかが私にとっての一つの挑戦である。如何にして古えの日本人から伝つて来た、石に対する儀式的な考えかたを、現代の生活及び要求に結びつけるか——私はこの問題に努力を打ち込んでいる。」

〔「芸術新潮」九・二〕

「石は彫刻の原点であつて、わたしを庭に魅きつけたものも石との関連である。だから仕事をするとときは、いつも新しい発見を作品に感じるけれども、それは石や大地が、まさにわたしをからだごと熱中させる魅力をもっているからである。」

〔「魂の木」八八 小沢書店〕

「石はあまりに早く終末に向かつて進んでいる時代のプロセスを止める……ことのできるものです。それは石というものが、地球の歴史の中で、非常に長い時間を生きてきて、これからも生きて行く底力をもつものだからで

す。」

〔芸術新潮〕八四・一二二

「大体の国では彫刻というと、石を人間の形か何か彫つてあるのですよ。ただ石を並べて美しいと思ふのは日本だけでしよう。」

〔芸術新潮〕五六・六六

「子供らしい、でっかい夢のようなもの。プレ・インカをはじめ古代の人々には、人類としての若さがあつたんでしようね。地球との一体感を感じる能力もまだもつていた。」

〔芸術新潮〕八四・一二二

「空から見る彫刻——こんな夢みたいな考え方を持つ人々がずっと以前にもいた。プレインカの人々です。ナスカの地上絵を飛行機からみたとき、僕は非常にうれしくなつた。ユーモラスな遊びの感じがありますよね。」

〔芸術新潮〕八六・一二二

「また、別の見方をすれば、この太陽の環はゼロをあらわす。窮極のゼロであり、われわれが生まれ、そして帰結するところの無のゼロである。」

〔芸術新潮〕六五・六六

これらの文を読むと、禅僧の境地で作庭などしていたことがわかる。彼は日本的センスをもって地上楽園を作ろうとしたのである。

あとがき

一人の人間が世にでるまでには、その人の才能と、よい人物との出会いが大切と思われる。しかし、最初に会いするものは誰もがその母親である。

イサムの母、レオニー・ギルモアは国際的大恋愛の果てに、苦難多い生活をすることになる。ヨネノグチはあまりレオニーの経済面には立ち入らなかつたので、彼女は日本語をよく話せずに、日本で自活していかなければならなかつた。

しかし、自分の子の才能は認めていたようである。茅ヶ崎に家を建てた時に、イサムは大工と親しくなり、設計図や大工仕事の面白さを知り、手伝つた。のち、母はイサムがいじめにあつて、登校拒否をした時に、この大工のところに行つて、指物仕事を学んでくるように、学校を休学させたりしている。

中学生となる時、イサムを単身渡米させる。彼は苦学して、のちコロンビア大学医学部に入る。しかし、米国に帰つてきたレオニーのすすめで、また、美術学校に通う方向に転換している。

母レオニーはイサム芸術的センスの抜群なものであることに気づいたからであろう。彫刻家——芸術家となる方向は、やはり母レオニーが決めた、と言ってよい。

イサムノグチは、生前、札幌のゴミ廃棄物処理場（二七〇万トン）を公園にするマスタープランを設計して、急逝した。（昭六三）翌年から公園造成事業は始まった。モエレ沼公園の完成は二〇〇四年である。約二〇〇ヘクタールの大地に、ひとつの彫刻品としての公園が十六年がかりで誕生することになる。

イサムノグチはこのように意志的な人であった。芸術家には「超然とした意志」が必要であることが、彼の芸術教育思想というべきであろうか。

参考文献

- (1) D・アシュトン、笹谷純雄訳「イサムノグチ」白水社 一九九七
- (2) ドウス昌代「イサムノグチ」（上下）講談社 二〇〇〇
- (3) 笹本正樹「緑の眼をしたおじいさん」美巧社 一九九七
- (4) S・ヴァインズ「詩人・野口米次郎」第一書房 一九二二
- (5) J. Greenspun: The Isamu Noguchi Garden Museum. Harry N. Abrams. 1987
- (6) Herbert Read: Modern Sculpture Thames and Hudson. 1964
- (7) Adde Vries: Dictionary of Symbols and Imagery. North Holland. 1974
- (8) 笹本正樹「イサムノグチ芸術小論——黒い太陽と黄金のリング」（「歴史と民俗伝承」収）丸山学芸図書 一九九二
- (9) 笹本正樹「イサムノグチ」（「香川年刊詩集」第一巻、収）香川県詩人協会 一九九七
- (10) 笹本正樹「五剣山イサム庭園」（「銀河詩手帖」収）銀河書房 一九八五